

1-2 . 地形

石狩川流域を地形特性によって区分すると、大きく「天塩山地」「夕張山地」「東部火山地域」「中央凹地」「石狩勇払低地」の5つに分類され、山地部6割、平地部4割で構成されている。

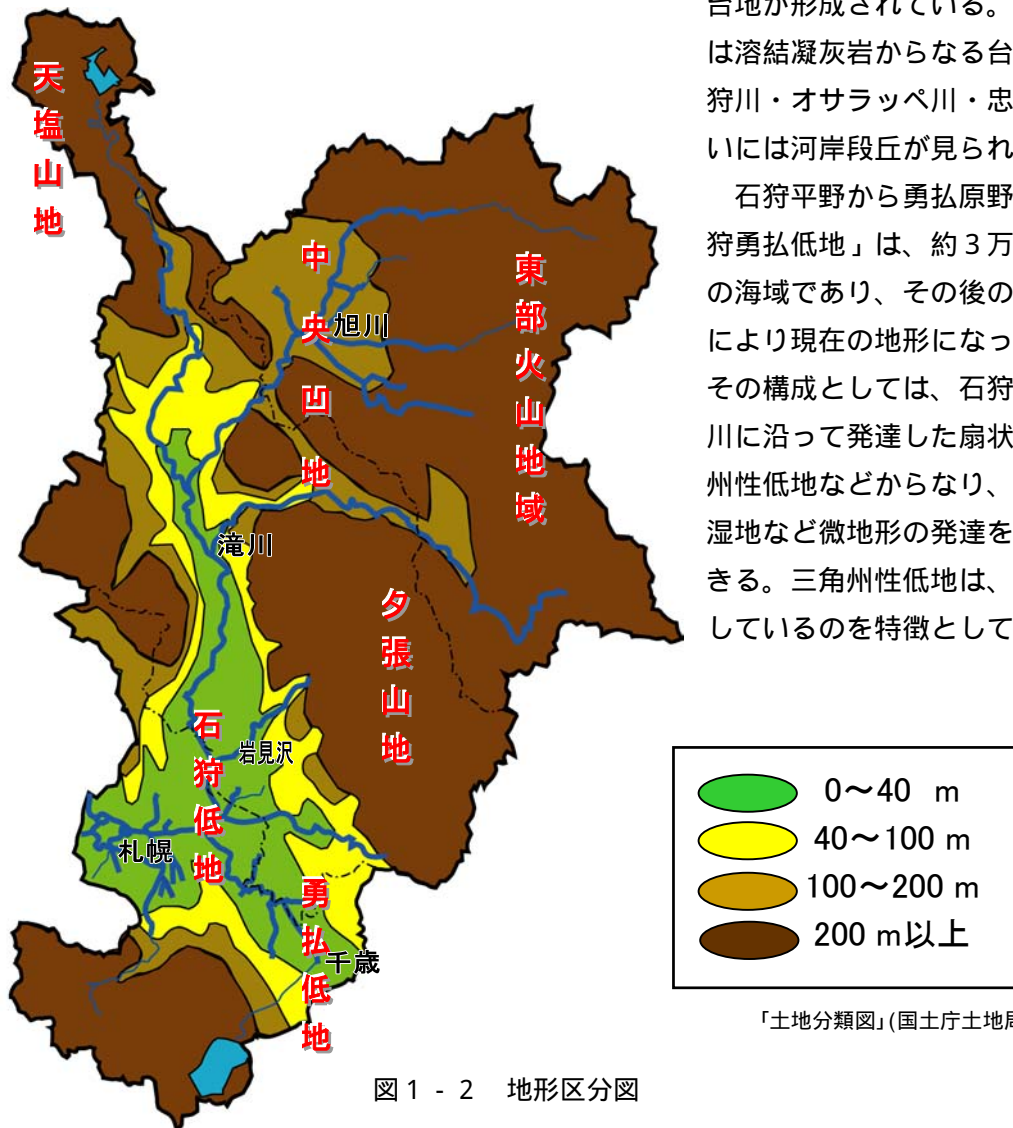
「天塩山地」に属している雨竜川流域の山地は、標高500～600mで、丘陵状の低い広大な山麓を形成している。また、雨竜川沿いには多くの河岸段丘の発達が見られる。

「夕張山地」はその主要山嶺が標高700～1,700mで東に遍在し、東方へは高い階段断層崖となっており、西方へは徐々に高度を減じて石狩低地に接している。

大雪山系は「東部火山地域」に属し、標高2,000m内外の旭岳・北嶺岳・石狩岳などの火山群からなっている。これら諸火山は、いずれも山頂部が比較的平坦な截頭円錐形をなしている。また、標高1,000～1,800mの所にゆるやかな起伏の溶岩台地が形成され、この台地が河川の浸食をうけて層雲峡や天人峡等の峡谷が形成されている。

上川盆地・富良野盆地は「中央凹地」に属し、上川盆地と富良野盆地との境には十勝溶結凝灰岩の台地が形成されている。上川盆地周辺には溶結凝灰岩からなる台地が発達し、石狩川・オサラッペ川・忠別川・美瑛川沿いには河岸段丘が見られる。

石狩平野から勇払原野へと連なる「石狩勇払低地」は、約3万年以上前は一連の海域であり、その後の支笏火山の噴火により現在の地形になったものである。その構成としては、石狩川およびその支川に沿って発達した扇状地性低地、三角州性低地などからなり、自然堤防や後背湿地など微地形の発達を認めることができる。三角州性低地は、泥炭がよく発達しているのを特徴としている。

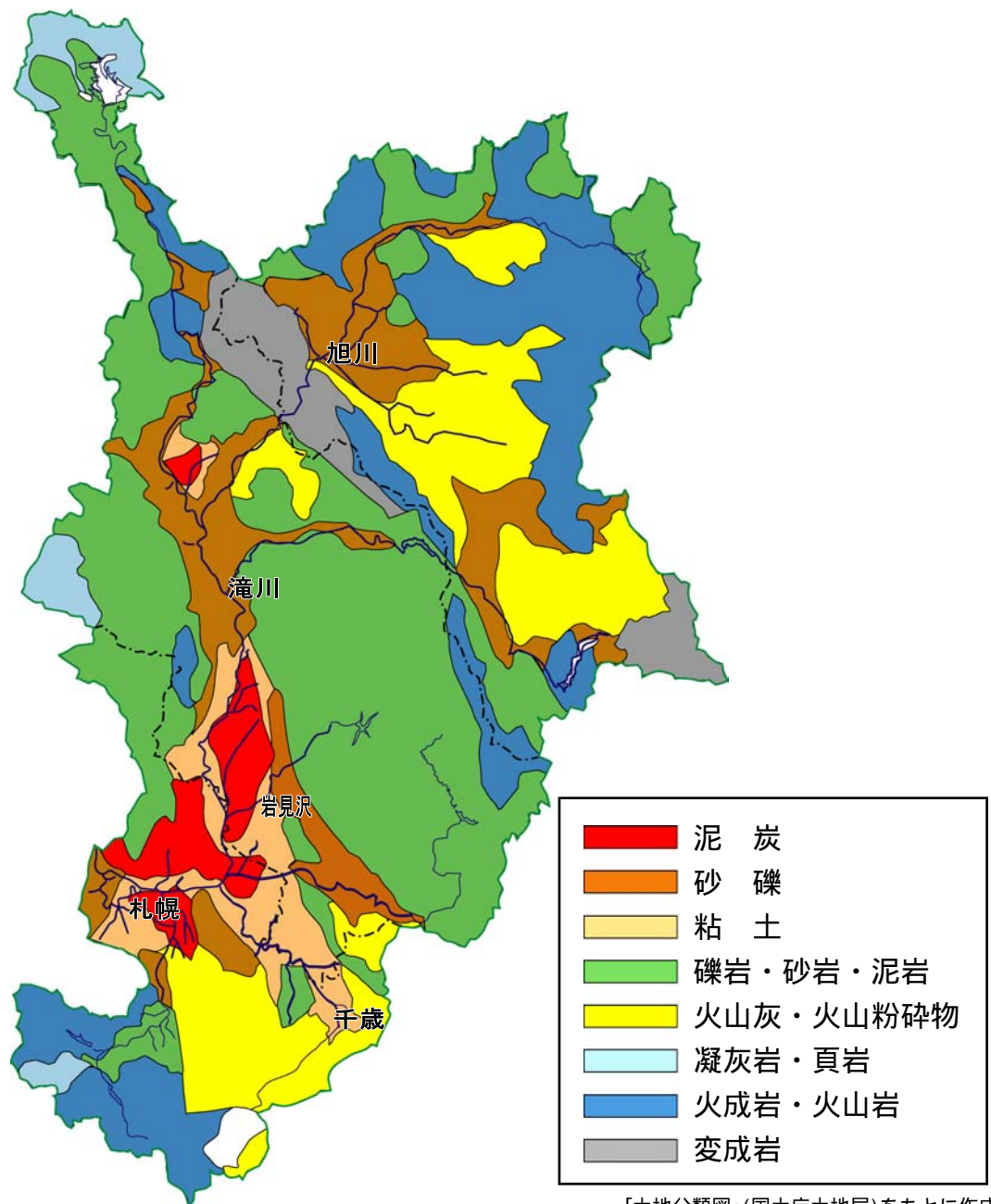


「土地分類図」(国土庁土地局)をもとに作成

図1-2 地形区分図

1-3 . 地質

石狩川流域の地質については、上流域・中流域・下流域のそれぞれで地質区分に顕著な特性がある。上流域については、源流に近い山間域において、大雪山系の火山活動に伴う火成岩・火山岩や火山灰・火山噴出物が広く分布しており、その下流の上川盆地では、砂礫からなる氾濫原堆積物が広く分布する扇状地が形成されている。上流域と中流域の境には、神居古潭変成帯と呼ばれる変成岩帯が河川を分断するように帯状に形成されており、その上流側では石狩川によって形成された上川盆地の扇状地が存在する。中流域については、山地丘陵部が礫岩・砂岩・泥岩で構成され、沿川の低平地においては、砂礫からなる氾濫原堆積物が広く分布している。下流域については、氾濫原堆積物から構成される粘土が分布していると共に、6万haにも及ぶといわれる泥炭地が分布しており、物理的、構造的に不安定な軟弱地盤地帯を形成している。



「土地分類図」(国土庁土地局)をもとに作成

図1-3 表層地質図

表 1 - 1 主な気象観測値

	札幌	旭川	滝川	全道平均	全国平均
平均気温	8.4	6.6	6.5	7.3	14.8
最高気温	32.8	33.0	31.5	30.5	35.4
最低気温	-15.1	-24.2	-22.5	-17.0	-5.0
平均風速	2.6	1.9	2.4	3.6	2.8
最大風速	12.8	10.8	13.7	17.3	16.0
日照時間	1868.4	1692.4	1657.1	1817.0	1983.0
降水量	1133.8	1099.7	1215.1	1135.6	1607.7

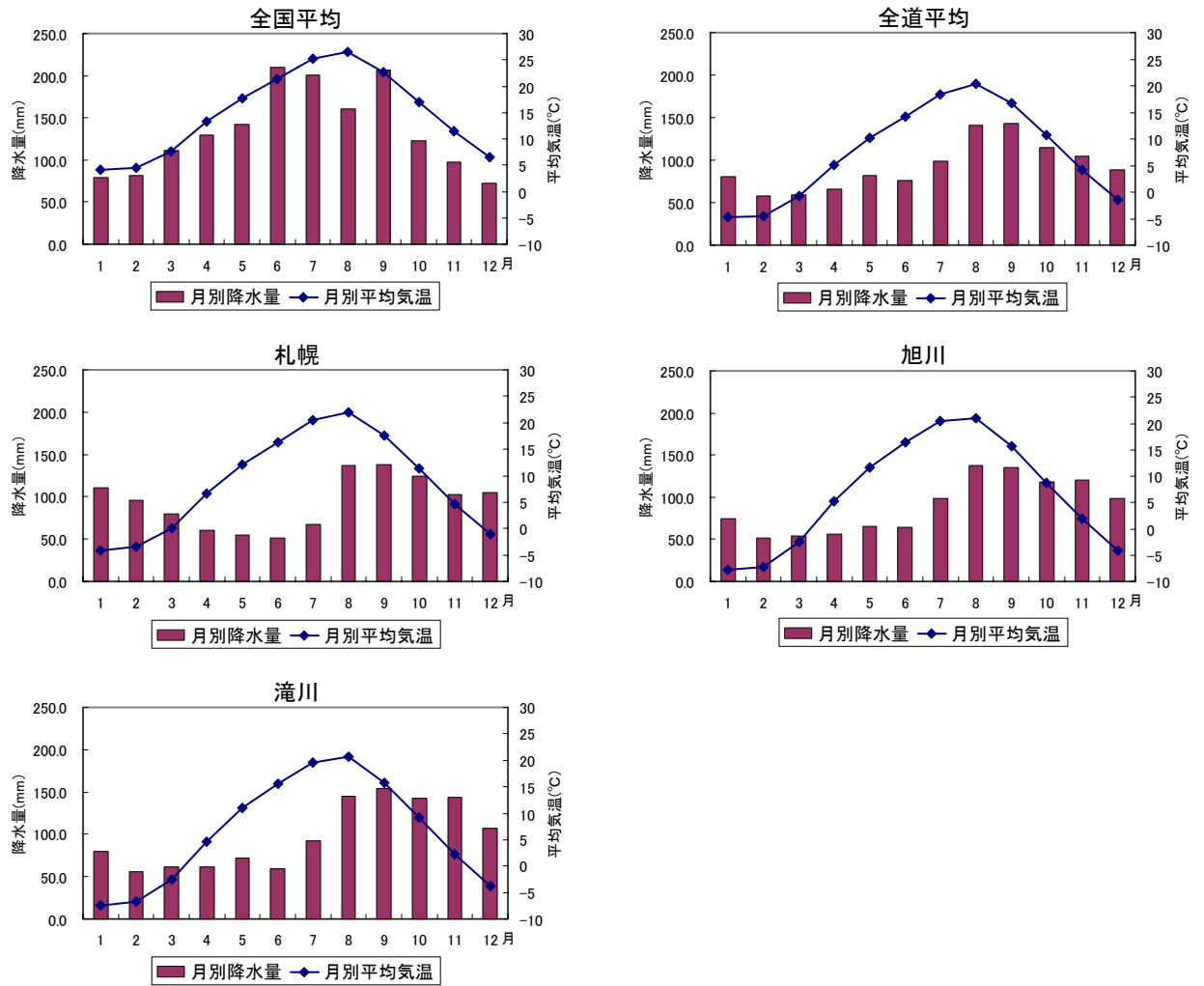


図 1 - 5 月別降水量

アメダス観測データを基に作成
 全国平均の値は1961年から2002年の各都道府県（県庁所在地）のデータを平均したもの。
 ・埼玉県は熊谷、滋賀県は彦根のデータによる。
 ・月別平均値は1979年から2000年のデータによる。
 全道平均の値は1961年から2002年の各支庁所在地のデータを平均したもの。
 ・月別平均値は1979年から2000年のデータによる。
 滝川の値は1979年から2002年のデータによるもの。
 気象観測値：観測年毎の値を平均して算出
 平均気温：観測各年の年間平均気温の平均値
 最高気温：観測各年の最高気温の平均値
 最低気温：観測各年の最低気温の平均値
 平均風速：観測各年の平均風速の平均値
 日照時間：観測各年の日照時間の平均値
 降水量：観測各年の降水量の平均値

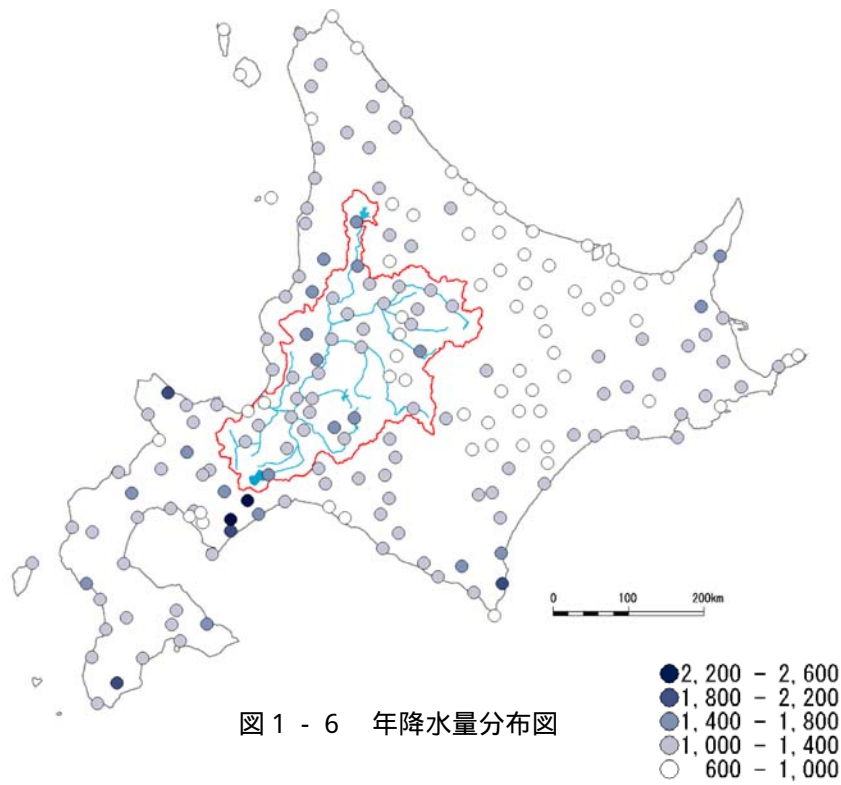


図 1 - 6 年降水量分布図

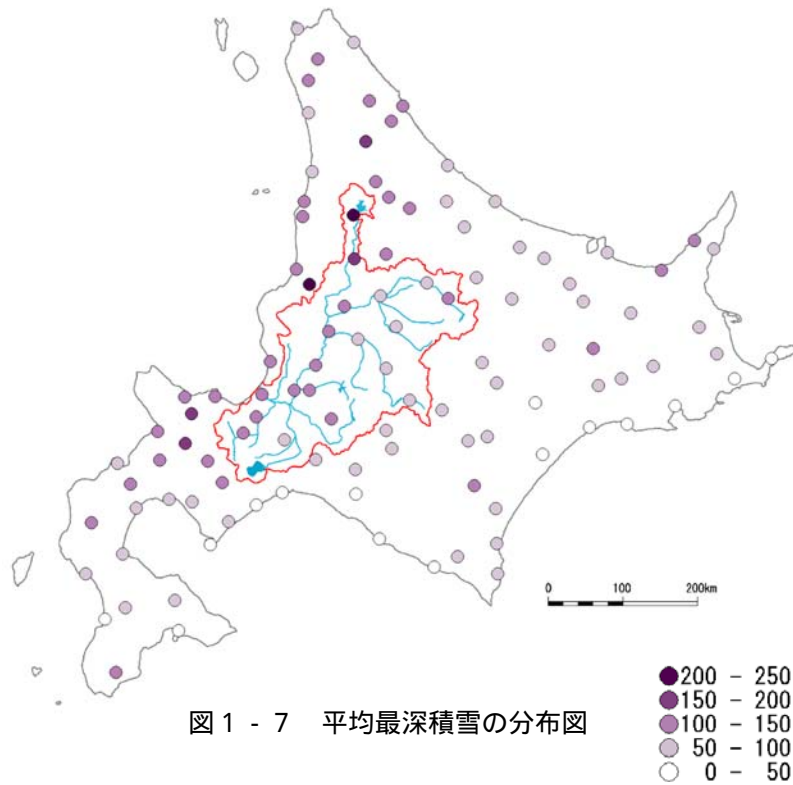


図 1 - 7 平均最深積雪の分布図

□ は石狩川流域を示す

北海道にある気象台、測候所、地域気象観測所（アメダス）で観測された、過去のデータを集計し図化した。
 統計期間 1961年～2002年、単位 cm